

# Ciel

～いつかの空へ～



キサラ佐京



## プロローグ

広大に広がるジエンディア大陸に、デル族と呼ばれる神秘的な能力や特別な力を持ち、人々から尊敬されている民族が暮らしていました。

しかし、そんなデル族の力を恐れた魔王は、デル族を消し去ってしまったのです。

時は流れ、ジエンディア大陸に訪れた冒険者が、次々と魔王と彼女が戦う映像を見て、メッセージを聞いたという噂が流れたのです。

——あなたの力が必要なのです。……私を見つけてください。必ず、見つけてください。

冒険者が見た映像は本当なのか。また、彼らに伝えたメッセージが示す意味は何なのだろうか。

イリスが失踪して五年以上が経つが、すべての真実を知る冒険者は現れていない。

「絶対、絶対に変。だって——その、ううん！ とにかく、嘘なのよ！」

エリアスのレストラン内で、栗色の髪をした少女がラピスラズリのように澄んだ青い瞳に似合わない怒りに満ちた表情を浮かべてテーブルを叩いた。

神経を逆撫でした猫のように気が立っているようで、長髪が逆立っているように思わせ、一斉に店員や客の視線が集まる。だが、当人は全く気にしていない様子で、対面の左隣に座っている気弱そうな少女に声を掛けた。

「ねえ、グレースもそう思うよね？」

「えっ……と。ど、どうなの、かな？ ……うう、イリアちゃん。そんなに目立つことしないでよ……っ。恥ずかしいよお」

俯きがちに真っ赤な顔でグレースと呼ばれた少女は委縮したように小さくなり、忙しなく周囲に視線を送っている。

その隣で呆れたように溜息を吐き、軽いウェーブの掛かった青紫色をした髪の女性が落ち着いた口調で宥めようとする。

「イリア。あんたは熱くなり過ぎよ。可哀想に、グレースちゃん。ただでさえ小さな体を小さくして、見えなくなっちゃうじゃない」

怯える子供を抱き締めるように女性はグレースのことを頭に両手を回して、安心させるように軽く頭を撫でた。

「そ、そこまで小さくない……ですっ」

すぐに消え去りそうな小さな声でグレースは反論したが、目を大きく開いて怒りを露わにするイリアの声に遮られてしまう。

「シズ姉は、グレースに甘過ぎ！ それだから、いつまでも引っ込み思案のままなんだよ」

本来は、物品保管庫の職員研修をイリアが終了したことを祝う予定だったのだが、それよりもイリアにとって重要なことがあった。

「別にいいじゃない。グレースちゃんのこういうところが、可愛いんだから」

目をさらに大きく見開いて、唇を噛みながらイリアはボックス席のソファに座り直す。

わざとらしく大きな溜息を吐いてから、イリアは軽い咳払いをして話を戻した。

「噂のこと、聞いている？」

先ほどまでの勢いとは打って変わって、イリアは思い詰めたような声を出す。

途端に会話の波が途切れ、レストランに静寂が生まれる。

グレースから手を離れたシズが、決まりの悪そうな表情を浮かべながら口を開いた。

「噂って、あの」

一度言葉を切り、声の音量を下げた。

「——イリスが死んだかもしれないって話でしょう？」

途切れていた会話の波が戻り、レストランに喧噪が戻って来る。

切り揃えられたライトグリーンの前髪を気にしながら、おずおずとグレースが口を開く。

「わ、わたしも聞いたこと……あるよっ。最近、よく冒険者の人たちが噂、してるから」

「単なる噂じゃない。それとも、本当だなんて思ってるの？」

テーブルに頬杖をついて、面倒くさそうにシズが不安そうな表情を浮かべているイリアに向かって尋ねた。

完全に勢いを失ってしまったイリアは、切なそうな声で呟く。

「だって、火のない所に煙はたたないっていうし——それに、もう五年以上も行方不明なんだよ？ ……心配にもなるよ」

イリアから視線を外して、窓の外を見つめながらシズは軽く息を吐く。

「悪かったわ。あなたは、イリスのことにに関してだけはいつも本気なのよね」

「——……っ」

隣に座っているグレースも表情を暗くさせて、心配そうな視線を向けている。

昼食時のレストランの中で、通夜のように黙ってしまった三人の座っているボックス席で一人、一言も会話に交ざっていなかった長身の女性が口を軽く拭ってから口を開いた。

「ごちそうさまでした」

両手を合わせて、眠たげな顔をイリアのほうに向けて長身の女性が薄らと微笑む。

「なら、確かめてみるだけ——イリスの行方」

「キョ、キョン？ 本当にそんなことが出来るの？」

驚いた眼差しを向け、イリアは僅かに期待の込められた表情を浮かべる。

自信あり気な笑みを浮かべて、キョンは立ち上がり小さく頷いたのだった。

「――で、どうしてワタシたちは地下水路に居る訳？」

地下水路入口から、長い鉄梯子を下りた場所にイリアたちは来ていた。

エリアスの生活排水が流れ、濁った水音が空気を振動させて響く。鼻を刺す独特な汚水の臭いは、すでにイリアたちの服にまで移ってしまっている。

どうしてイリアたちが地下水路に来ているのかと言えば、一人だけ涼しい表情を浮かべているキョンが切り出した提案のせいだった。

「イリスは魔王と戦っていた。でも、誰も魔王の場所を知らない」

一度レストランで解散してから、再び集まった地下水路入口で、鉄梯子を下りながらキョンが説明した。

「同じ魔王ゴブリンなら何か知ってるかも……っ？」

そして、現在に至る。

「どんな根拠なの、それっ！ 絶対知ってる訳がないじゃない。魔王っていっても、初心者でも気軽に倒せる魔王ゴブリンよ！」

憤慨しているシズは、ロクに話も聞かずに地下水路まで来てしまったことを後悔しているようだった。

対して、冒険者と黒猫衣装を合わせてイリアは目を輝かせていた。

飾りのはずの尻尾が左右に揺れて、イリアの気持ちを表しているように見える。

「私は良いと思うよ。もしかしたら、知ってるかも。だって、これまで誰も確かめたことないし、確かめる価値はあるよ」

「いや、ないわよ……っ。断言しても良いわ」

冷静に突っ込みを入れたシズの発言は聞こえなかったことにして、背中に背負った弓を手にとってイリアは元気に声を出す。

「モンスターが現れたら、私に任せてね。弓にはちょっと自信があるんだから」

鞘から弓矢を抜き、弓を放つ姿勢は様になっていて、得意げに語るイリアに嘘は無い。初めてイリスに出会ったあの日から、イリアは独学で弓の鍛錬を重ねてきたのだ。

並の冒険者には負けない自信がある。

「大丈夫。私も、魔法使えるから」

なぜか小悪魔的なパンクファッションに身を包んでいるキョンが、背中の腰辺りに携えていた分厚い本を取り出して言葉を紡ぐ。

「ファイヤーバースト」

すると、空中に空気が収束し、巨大な火の玉が出現し、穿たれた。

突然の熱量に避けることも出来ず、マリルックに身を包んでいたグレースのスカートを掠り、焦げ跡が残ってしまう。

「ウィンドカッター」

続いて唱えた魔法で、僅かに空気が振動したかと思った時には、グレースのスカートの深いスリットが出来上がっていた。

魔法の攻撃を受けたことよりも、切れたスカートの手を当てて、顔を真っ赤に染めながらグレースはその場にしゃがみ込んでしまう。

「――っ！ う、うう……っ。酷いよお、キョンちゃん。は、恥ずかしい……っ」

瞳にいっぱい涙を溜める表情は、どこか小動物的な印象を受ける。

軽くこめかみに手を当てたシズが、グレースの隣にしゃがんで口を開く。

「見せてみて。ワタシ、ソーイングセット持ってきてるから、直してあげる」

一人物品保管庫職員の制服を着ているシズが、ポケットから制服と同じ水玉色の小さなソーイングセットを取り出して、慣れた手つきでスカートの針を通して行く。

縫い終わったところで、シズは軽く頷いて顔を上げた。

「仮縫いだから、後でちゃんと縫ってあげる」

「う、うん。……ありがとう」

「どういたしまして」

快活さの溢れる爽やかな笑みを浮かべてから、キョンに視線を向けたシズが肩の力を落とす。

「悪ふざけもほどほどにしなさいよ、全く」

怒っている様子はなく、悪さをした子供を窘めるような口調で説教をするシズの言葉に頷いて、キョンは少しだけ表情を暗くした。

「ごめんなさい。面白かったから、調子に乗った」

「——え、ええっ？」

か細い声で驚きを露わにしたグレースは、僅かに怒ったような視線をキョンに向けるが、上目遣いに拗ねているようにしか見えない。

和み始めた空気の中で、切り裂くようにイリアが張りつめた声を上げる。

「今の魔法で、地下コウモリたちが反応したみたい」

すでに弓を構えて臨戦態勢のイリアは、途端に静まり返った水路の中で地下コウモリの羽音に耳を澄ませる。

近づいて来る音を感じて、イリアは弓を放った。

「――そっ！」

薄暗い水路内で、一直線上に放たれた弓矢が闇に消えたと思った瞬間、水音とともに一匹の地下コウモリが水路に落下した。

この一撃で警戒したらしく、近くで羽ばたいていた音が消え、緊張を解いたイリアは小さく息を吐く。

先ほどまでとは一転してこの場に居る全員が、現在立っている場所がモンスターの生息する危険地域だということを認識していた。

それでも周りに注意していたイリアが、完全に気配が消えたことを感じて口を開く。

「もう、大丈夫。ほらね、私に任せておけば安全なんだから」

安心させようとイリアは、軽口を言いながら満面の笑みを浮かべた。

実際のところ、地下水路ほどのモンスターならばイリアの敵ではない。

「今回ばかりは、あんたが頼りに思えるわ」

「そうでしょう、そうでしょう。って、今回ばかりってどういう意味？」

噛み付いてくるイリアのことを無視して、シズは真剣な表情を浮かべて口を開く。

「帰りましょう。ここはもう、遊び半分で来てはいけない場所だわ」

「えっ、ちょっと待ってよ！ こんなモンスター、私の敵じゃ――」

「イリアにとってはそうかもしれない。けど、ワタシやグレースちゃんはどう？ あんたみたいに弓は使えないし、キョンみたいに魔法も使えないわ」

強い口調で話すシズからは、冗談や嘘は感じられない。

思わず口籠り、正論にイリアも反論することも出来ない。

「――わたし、は大丈夫……だよ。と、途中で諦めたくない、よッ！」

弱々しい口調で、それでも真剣な瞳でシズのことを見つめながら、グレースは言葉を紡ぎ、両手を握り締めて続ける。

。

「だからっ！ シズさんも、わたしを理由にしないで……っ」

あまりに予想外の方向からやってきた反論にシズも困惑しているようで、目を丸くしていた。だが、すぐに落ち着きを取り戻したシズは論すような口調で尋ねる。

「ごめんなさい。でも、グレースちゃんはイリアの迷惑になりたくないって、遠慮しているだけなのよね？ 本当は、怖いと思ってるんじゃないのかしら？」

シズの優しく声にグレースは身体を僅かに震わせて、数秒経ってから首を横に振った。

「怖い、けど……っ。わたしは、イリアちゃんの手伝いをしたい、の――こ、これはわたしにとっても、引っ込み思案なところを直せるかもしれない、チャンスだ、から」

段々と声小さくなり、最後のほうは辛うじて聞き取れるといったほどだった。

静かに流れる水流だけがこだまする地下水路で、イリアは大きく息を吸って叫ぶように口を開いた。

「私は、もう誰かを護れるくらい強くなったよ！」

反響する声が地下水路中を満ちて行く。

突然の大声にシズだけではなく、グレースもキョンも目を丸くして視線をイリアに向ける。

「ただ護られるだけの子どもじゃないよ。イリスさんに近づきたくて、もう一度会って話をしたくて、あの時助けた女の子があなたに憧れて、こんなに成長したことを話したい」

それぞれに視線を合わせてから、満面の笑みを浮かべてイリアは続ける。

「私の願いは、いっぱいありがとう、を伝えたいから、イリスさんに会いたい」

唐突なイリアの告白を聞いて、一様に困惑した表情を浮かべている。

その中で、先にイリアのことを真っ直ぐ見つめたグレースが口を開いた。

「わ、わたし――引っ込み思案な自分が大嫌いで、直したくて物品保管庫の職員になった、の。人と関わるお仕事なら、少しでも変われると思ったから」

視線を逸らさず、僅かに震える両手を握り締めながらグレースは告白を続ける。

「でも、それは他人任せだって分かった。だから、少しでもわたしの意思でものを言えるようになることが、わたしの願い――ですッ！」

最後には緊張し過ぎてしまったようで、両手を胸で合わせてグレースは固く目を瞑っていた。

それでも、しっかりとイリアにはグレースの想いが伝わって来た。

「全く、いつの間に変わっちゃって。お姉さんとしては寂しいわ」

けっして責めるような口調ではなく、反対にとても優しく呟いて、シズはイリアとグレースに手を伸ばして、途中でそっと両手を胸に戻す。

「本当、年は取りたくないわ」

「うわっ、それすごくオバさんっぽい」

「お、オバ……っ。イリア！ あなた、世の中には言ってはいけない言葉があるってことを知らないようね」

沸々と背後に負のオーラを纏い始めたシズが、満面の笑みを浮かべてイリアに歩を詰める。

「そ、そうやって怒るってことは、シズ姉もそう思ったってことでしょ」

詰められた分後方に下がりながら、視線を泳がせるイリアは引き攣った表情を浮かべる。

「黙りなさい！」

「あああっ！ シズ姉が怒った！」

背中を向けて逃げ出そうとしてイリアの耳に、ずっと黙っていたキョンの声が聞こえてくる。

「――来る」

立ち止まったイリアはすぐに耳を澄まして、神経を研ぎ澄ませて、緊張した面持ちで視線を水路先の暗闇に向ける。

「嘘、すごい数。十、ううん、二十は近付いて来てる」

「――任せて」

言葉と同時にキョンは先頭に立ち、魔導書を広げて魔力を高め始めた。

次第に近付いて来る気配がシズやグレースにも分かるようになって来た頃、ゆっくりと片手を前に差し出してキョンは詠唱した。

「――フレイムバンガード」

「ちょ、そんなのここで撃ったら！」

途端に無数の炎球が出現し、水路が陽に照らされたように明るくなる。

さらに炎球が強く光を放った刹那、イリアが叫んだ。

「みんな、伏せて！」

叫びを聞いたシズとグレースが伏せた瞬間、轟音と爆風が一瞬にして水路を包み込んだ。



怪我をしているグリーンウォーカーを治療したことがきっかけで、当時イリアは毎日のように枯れ木の森に来ていた。

本来、モンスターが出現する場所に立ち入ることは禁止されていたのだが、イリアくらいに子どもにとって、禁止なんて言葉は反対に好奇心を刺激するだけだろう。

イリスと出会った日は、イリアにとっても特別な意味を持つ日だった。

「グリーン、今日も遊びに来たよ！」

慣れた足取りで進みながら、イリアは岩場に大人が一人入れそうなほどの洞穴に向かって歩いて行く。

怪我をしたグリーンウォーカーを治療する為に偶然見つけて以来、居心地が良かったのか、グリーンウォーカーが居ついてしまったのだ。

以来、名前をイリアがグリーンと名付けて世話をしている。

「クィクィッ」

「こ、こらっ。もう、嬉しいのは分かったから」

頭をすり寄せて来るグリーンを宥めながら、花が咲いたような笑顔を浮かべてイリアは肩掛けのバッグからハムサンドイッチを取り出す。

すると、途端にハムサンドイッチのほうに興味を移すグリーンに対して、呆れたようにイリアは溜息を吐く。

「おいしい？ おいしいよね」

頭を撫でると気持ち良さそうに目を細める表情に微笑みながらも、すぐにイリアは表情を曇らせて語りかけ始めた。

「実はね。もう、ここには来れないんだ」

誰にも見つからないようにしていたつもりだったが、イリアが度々エリアスを向けだしている姿を目撃されていた。これまでは、それでも見逃してくれていたらしいのだが、最近になってある問題が起きている。

それはワーウルフの活発化だった。

これまでも度々問題になっていたのだが、最近になってより狂暴になり、さらには群れを作り冒険者やエリアスの住民を襲い掛かるという事件が続出していた。

「クィ、クィイ？」

イリアの不安を感じ取っているのか、グリーンも心なしが不安げな声の鳴き声を出す。

一瞬だけ目を見開いて、力無く笑みを浮かべながらイリアは掠れた声で続ける。

「危ないんだって。でも、そんなところにグリーンを置いて行くななんて――」

出来るはずがないと、イリアは表情を歪め始める。

「だから、今日でお別れしよう？ グリン。安全なところまで一緒について行くから」

本当はすでに枯れ木の森に近づけないように見張られて、イリアは今日も僅かな隙をついて抜け出してきていた。

ずっと悩んで、幼いイリアは別れを決断したのだ。

「このままここに居たら、いつかグリーンも襲われちゃうよ。だから、お願い」

「クィクィ」

真っ直ぐに見つめて来るグリンの瞳に罪悪感を覚えて、イリアは咄嗟に目を逸らしてしまう。

どんなに正当な理由だとしても、イリアがすることはグリーンを捨てることに違いない。

「ごめんね。――ごめんね」

何度も謝ってから、イリアはグリーンを連れて洞穴から出て、比較的グリーンウォーカーの外敵がいないベロスよりの山森地帯に向かい始めた。

途中何度も洞穴に戻ろうとするグリーンを宥めながら、イリアは目的の山林地帯に入った。

「――うそっ。なんで？ こくら辺にはいないはずなのに」

山林地帯に入り安堵した矢先の出来事にイリアは、信じられない光景に動けなくなる。

通常よりも倍以上に成長したワーウルフを筆頭に数十匹のワーウルフの群れが、イリアとグリーンを取り囲むように広がり始めていた。

理解の出来ない状況に困惑しながら、思考が戻って来てイリアは数歩後ろに下がる。

ふと視界にグリンの姿が映り、一度強く両手を握り締めたイリアは、咄嗟にグリンのことを抱き締める。

その瞬間、筆頭のワーウルフと反対方向にイリアは走り出した。

「絶対、絶対に護ってあげるから……っ！」

恐怖で止まりそうになる脚を奮い立たせて、グリーンを助けることだけを考えながらイリアはひたすらに走り続ける。背後から感じるワーウルフの気配が、だんだんと近づいて来る。

「グウッグルアッ！」

「――あっ、きゃあッ！」

吠えた鳴き声に振り返った瞬間、イリアは樹の根に足を取られてしまう。

抱きかかえたグリーンを護る為に地面に背中を向けて、イリアは頭を下げて強く目を閉じた。

衝撃があった瞬間、反動でグリーンが手から離れて、イリアはすぐに目を上げる。

「クイツ、クイツ！」

起き上がった視線の先でグリーンは、威嚇するような激しい鳴き声を上げて、イリアを護るように立ち塞がっていた。すぐに助けようと動こうとした時、激しい痛みが足首を襲いイリアは苦悶の表情を浮かべる。

「グリーンッ！　――ダメッ！」

次の瞬間に起こった光景にイリアは言葉を失い、目の前が真っ暗になった。

目を大きく見開いて、両手を口元に当てながらクリアは声にならない絶叫を上げる。

「もう、大丈夫よ」

意識を失う直前、どこかから優しい女性の声がイリアは聞こえたような気がした。

次にイリアが目を覚ました時、視線の先にはさほど年齢の変わらないように見える少女の姿が映った。

「気づいた？　もう大丈夫よ。ワーウルフは追い払ったから」

柔和な笑顔を向けて来る少女は、長いウェーブの掛かった淡いピンク色の髪の毛をしていた。同色の宝石のように澄んだ瞳、透き通る白い肌、それはとても同じ人とは思えないほど綺麗で、同性のイリアでも見惚れてしまうほどだった。

だが、意識が戻って来たことで我に返ったイリアは、半ば叫ぶように尋ねる。

「グリーンは、グリーンはどこ？」

上体を起こしたことで視界が開け、イリアの視線に不自然に盛り上がった土の山が映る。僅かに表情を曇らせた少女は、申し訳なさそうな声で答えた。

「手遅れだったの。ごめんなさい」

「――っ！」

目の前の現実を受け止められなくて、段々と激しくなっていく心臓の鼓動がイリアを動揺させ、頭が沸騰したように熱かった。

目の焦点が合わなくなり、全身の力が勝手に抜けて行く。

「強くなるしかないの」

「えっ？」

顔を上げて、イリアは少女のほうに視線を向ける。

「悲しい思いをしなくても済むくらい、強くなるしかないの」

それはイリアに向けて言っているようで、自分に言い聞かせているようにも聞こえた。

これが二人の――イリアとイリスとの出会いだった。

「死ぬかと思ったよ！　っていうか、何で使えるの！」

爆風で意識が飛びそうになるのをどうにか耐え、すぐに立ち上がったイリアは怒りを露わにする。

すでにモンスターの姿は跡形もなく、倒したのか、逃げだのかも判断出来ない状況の中で、キョンは微笑を浮かべて答えた。

「後、風も、水も、地も使えるけど——見たい？」

「遠慮するよ！　ホントに死んじゃうから！」

心の底から叫んで、イリアは精神的に疲れを覚えながら改めて状況を確認する。

至る所に焦げ跡が残っているが、損傷自体はそれほど大きくないようで、倒されたモンスターの姿も、気配も感じない。

完全にキョンの魔法で怯えてしまっているのだろうと、イリアは考える。

「——う、うう……っ。な、何があった、の？」

「グレース！　良かった、無事みたいね。それに、シズ姉も」

困惑しているグレースの隣で、頭を押さえながらシズは状況を整理しているのか、何かを呟いている。

一先ず全員の無事を確認したイリアは安堵して、視線を水路の先に向けた。

「じ、じゃあ、あと少しで目的地だし——が、頑張ってください！」

躊躇いがちに拳を振り上げて、イリアはグレースやシズの顔色を窺う。

まだ困惑している様子のグレースは、戸惑った表情を浮かべながらも立ち上がり、しっかりと頷いて見せた。

先に立ち上がっていたシズは、すでに状況を整理したようで、溜息交じりに呟いた。

「ここまで来たんですもの。もう、諦めたわ」

再びイリアを先頭に歩き出し地下水路一区域を越えて、地下水路三区域に入った。

地下水路三区域に入れば、魔王ゴブリンはもう間もなく出現エリアに到着する。

「ねえ、イリア。もし、仮に魔王ゴブリンからイリスの行方が聴けたとして、イリアはどうするつもりなの？」

「そんなの、決まってるよ」

先頭を歩くイリアは、振り向くことなく断言する。

「会いに行く」

返事など決まりきっていると思いながら、イリアはシズが尋ねた意味を掴み兼ねていた。

「あんた、研修が終わったって言ってたわよね？　物品保管庫の仕事はどうするつもり？」

「そ、それは……っ」

咄嗟にイリアは答えられなかった。

来月から、正式に物品保管庫の職員となることが決まったイリアは、シズと同じエリア勤務がすでに決定している。日に日に増える一方の冒険者に対応して、物品保管庫の職員の求人も増えていた。

もし、イリスの行方が分かったら、そうイリアが考えた時、すぐに考えられる答えは口にも出したように、イリスに会いに行くことだった。

命の恩人であり、イリアにとって生きて行く目標をくれた人でもある。会いたいと思うことは当然で、イリア自身何に代えてももう一度会いたいと願っている。

だが、物品保管庫の職員になろうと思った動機を思うと、イリアは決断を迷ってしまう。

「口を開けばイリスのことばかりのあんたが、本人に会いたい気持ちは分かるわ。あんたからいろいろ話も聞かされているしね。だから、ワタシは止めるつもりはないわ」

でも、と真剣な口調でシズは続ける。

「あんたは仕事を放棄してまで、イリスを追う覚悟があるのか聴かせてちょうだい」

俄かに重い沈黙が地下水路内に流れ、すぐに答えを見つけれないイリアは、呟くような小さな声で答えるしかなかった。

「そ、そんなこと——突然、言われても分からないよ」

答えになっていないことは一目瞭然で、さらに追及して来ると覚悟していたが、予想に反してシズはこれ以上何も訊いて来る事はなかった。

重苦しい沈黙の中で、自然とイリアの足取りも重くなる。

今ならまだ引き返せる、と頭の中でイリアは考えて、そのあまりに自分勝手過ぎる考えに自分が嫌になりそうになった。

「居た。どうする？ ここからなら、私の魔法も届く」

淡々とした口調でキョンは言って、魔導書を手に取る。

魔導書を制して、イリアは首を振った。

「それはダメ。魔王ゴブリンのほうが、キョンの魔法に耐えられないから」

「なら、どうするつもり？ まさか、今更帰るなんて言わないわよね」

当然、シズとグレースは戦うことが出来ない。反面、キョンの魔法は強力過ぎて魔王ゴブリンと話が出来なくなる危険性がある。

ならば、消去法で方法は一つしかない。

「私が一人で、話してみる。ここまで付き合ってもらったんだし、戦うことになっても負けることはないと思うから」

続けて誰も口を開かず、誰もが他に方法がないことを分かっていたようだった。

一人前に出たイリアは、魔王ゴブリンに向かい始めた途中、一度振り返って笑顔で口を開く。

「もし、万が一のことがあったら、キョン。そのときはよろしくね」

言い終わるか言い終わらないかのタイミングでイリアは走り出し、背中を向けていた魔王ゴブリンに向かって呼びかけた。

「魔王ゴブリン、あんたに話があつて来たの！ さあ、こっちを向きなさい！」

弓を引き、戦闘態勢に入ったイリアは、自分よりも五倍以上巨大なモンスターを前にして僅かに笑みを浮かべる。

「――マタ、冒険者カ。イヤ、違ウナ。オマエハ、コチラ側ノ人間ダ」

「どういう意味？ ううん、そんなことより私は、あんたに訊きたいことがあるの」

弓を構えた状態で、イリアは敵意を感じないながらも気を張ったまま尋ねる。

「イリスさんの行方――」

イリスの名前を聞いた瞬間、僅かに魔王ゴブリンは肩を震わせて、途端に警戒した雰囲気を漂わせ始めた。

間違いなく何かを知っていると踏んで、イリアはさらに追及する。

「何か、知ってるのね。教えて、じゃないと痛い目見ることになるわよ？」

「オマエ、何カヲ迷ッテイルノカ？」

「……っ！」

魔王ゴブリンの言葉に動揺して、イリアは咄嗟に弓を引く力を抜いてしまった。

この僅かな瞬間を突いて、一気に距離を詰めてきた魔王ゴブリンは巨体に見合わない速度で突進を繰り返して来る。驚きながらも、身体の反応に任せてイリアは横に跳び、どうにか突進を避けると弓を構え直す。

だが、頭の中では魔王ゴブリンが口にした言葉が何度もリフレインして離れない。

「わ、私は迷ってなんて――迷ってなんてない！」

自分に言い聞かせるようにして放った弓矢は、僅かに魔王ゴブリンの頭上を越えて行く。この間にも再び魔王ゴブリンは突進の体勢に入り、助走もなく弾丸のような速度で走り出した。

全く予想していなかった方向に飛んだ弓矢に気を取られ、イリアは魔王ゴブリンの突進に気づくのが遅れ、跳んだ左足が攻撃を受けてしまう。

「うっ、うう……ツ」

突進に巻き込まれた左足から、発火したかのように熱を持ち、同時に想像を絶する激痛が襲ってくる。

「モウ、終ワリカ？」

左足を押さえながら、ゆっくりと近づいて来る魔王ゴブリンに対して、イリアはなすすべもなく見上げる事しか出来ない。

――迷ってるのかな、私。

危険が目の前にまで迫っているにも関わらず、どこか遠い出来事のように現実感がない。

何も考えていなかったわけではなく、深く考えすぎないようにしていた。

行方不明になったという噂が流れた時も、イリアは今回と同じように居ても立ってもいられなくなった。家を飛び出して、居ないと分かっているながらも街の周辺を走り回って、一日中イリスの名前を呼び続けた。

結局イリスを見つけられず、時間が経つにつれて目の前に現実にイリアの気持ちは薄れて行った。

今回も同じことだったのかもしれない。

イリアが物品保管庫の職員を目指した理由は、イリスのことを捜す冒険者の手助けをしたかったからだった。

今になって思えば、間接的にでもイリスと繋がっていたかったのかもしれない。

迷っていたのは、仕事を辞めてイリスのことを追うのではなく、その先、イリスと再開した後だった。

もしかしたら、イリスは一度だけ会ったイリアのことなど憶えていないかもしれない。これまでずっと目標にしてきたことが、本当は無意味だったと突きつけられるのが怖かったのだ。

「何だ。すごく自分勝手だ、私」

気づいて後悔した時にはすでに手遅れで、鉄槌を振り下ろそうとする魔王ゴブリンの姿を虚ろな瞳でイリアは見上げる。

「今更何言ってるのよ。そんなこと、みんな知ってるわ」

「――えっ？」

一瞬、目の前の光景がイリアには理解出来なかった。

「イリアはいつも自分勝手」

「わ、わたしは。そんなイリアちゃんが、いつも――凄く眩しかったんだ、よ」

今にも振り下ろされようとする鉄槌の前で、イリアを護るようにシズにグレース、キョンの三人が立ち塞がっていた。

一瞬で我に返ったイリアは三人のことを護ろうとして、左足を怪我してることも忘れて立ち上がろうとする。

だが、その瞬間、キョンの口から一節の呪文が唱えられた。

「――ファイアメテオ」

突如巨大な岩石が、隕石のように魔王ゴブリンに向けて降り注いだ。

啞然と降り注がれる巨大な岩石を見つめながら、渾身の力を込めてイリアは叫んでいた。

「だから、キョンは何でそんなのが使えるのよおっ！」

エピローグ

結局、どうにか無事に生きていた魔王ゴブリンは、イリスの行方を知らなかった。

後で話を聞くと前にイリスと戦った際、手も足も出せず負けたことを根に持っていただけだったらしい。

元々あった噂も、後になってデマであることが発覚して、結果だけを見つめればイリアたちの行動はただの徒労に終わっただけだった。

普段と変わらない日常が戻って来て、物品保管庫としての仕事が始まったイリアは日々の生活に忙殺されている。研修を終えたといえ、覚えることはいくつもあり、あの日の冒険が夢だったのではないかと思えるほどだった。

「イリア。それが終わったら、こっちの手伝いもお願い！」

「うん、分かった！」

日々の中でイリアはまた、イリスに対する気持ちが薄らいでいくのかもしれない。

いつまでも一つのことを追ってられるほど、現実にはイリアのことを待ってくれない。毎日に変化している中で、早く一人前になれるようイリアは新たな目標を立てて日々を送っている。

次に新たな噂が流れたら、どんな状況でもイリアは懲りずに飛び出し行くつもりだった。

それまでは信頼出来る仲間とともに、ときめきで溢れるこの世界で冒険者たちを待っていることにした。

「いらっしやいませ、本日のご用件はどういたしますか？」